



信友会会報

<<11月例会より>>

信友会の11月例会は信友会の森沢弘雅さんに聖書の中でも多くの謎を投げかけている「ユダヤ民族」のルーツを探り、世界の歴史に強烈な痕跡をとどめる反セミティズム（ユダヤ人への対抗、迫害）の実態、そして今日のイスラエル・パレスチナ問題について明快に解説していただいた。

信友会 11月例会

ユダヤ民族の歴史と実態 今日のパレスチナ問題まで

森沢 弘雅

1. パレスチナとは

パレスチナという用語は、現代ではイスラエル国とは分離されたパレスチナ自治区を指しますが、古い時代では現代のイスラエル領とパレスチナ自治区を合わせて呼ばれておりました。

地図で見ますと、北東にシリア、北にレバノン、南西はエジプト、東はヨルダン、西は地中海に囲まれた約2万770平方キロの地域。かつてはカナンと呼ばれ、後にローマ帝国によってペリシテ人の土地を意味する「パレスチナ」と呼ばれるようになりました。

ペリシテ人の正確な祖先はまだ解明されておりませんが、かつては「海の民」とも呼ばれ、紀元前1200年ごろ小アジア方面から陸と地中海を渡って上陸し、カナンからエジプトまで征服を企てたのですが、エジプトのラムセス3世に逆襲されて再び北上し、カナンの一部に定住した民族です。先に定住していたイスラエル民族とは分離されて、ペリシテ人たちはガザ、ガト、エクロン、アシュド、アシュケロンの5都市に定住しました。（サムエル記上16～17）

彼らは、馬や鉄器を使って先住のイスラエル人を脅かしておりましたが、サムエル記によりますと、ペリシテとの戦いの必要上イスラエルに王制が敷かれ、初代王サウルが生まれるきっかけとなったことはご存知と思います。

民族としてのペリシテ人はダビデによって滅ぼされ、歴史からは消滅します。

統一王国となったイスラエル国は、その後ダビデの子ソロモンの死後分裂し（前931年）やがて北イスラエル、南ユダとに分かれましたが共に順次滅亡します。

イスラエルすなわちユダヤとも呼ばれてきた土地は、大陸の結節点に位置しているため、軍事上、地勢学上の重要性から、相次いで周辺大国の支配を受け（特にアレキサンドロス大王征服後はシリアの支配下に）、最後のユダヤ王国ハスモン家が約100年支配しましたが、遂にローマ帝国の属国となり、そしてヘロデ大王、イエス・キリストの登場など新約聖書の世界につながっていきます。

紀元132～5年最後のユダヤ戦争（バル・コクバの乱と呼ばれます）後は、時のローマ皇帝ハドリアヌスによって、それまでのユダヤ属州名を廃止して、「ローマ属州シリア・パレスチナ」と改名させられたのです。ローマ帝国の意図は、幾度も反乱を繰り返すユダヤ民族の痕跡を完全に消してしまうことでした。いわば蔑称として、1000年も前にダビデによって消滅させられたペリシテ民族の名前をつけたわけです。



その後、ローマ帝国もやがて消滅すると、11世紀にはヨーロッパから十字軍の襲来、転々と支配国が変わって16世紀にはオスマン帝国がパレスチナの支配を開始しました。ここには、民族としては主にユダヤとアラブ人が住み着いておりました。

2. 今日のパレスチナ状況まで

(1) ユダヤ民族迫害の歴史

1492年8月3日、コロンブスがアメリカ大陸を発見しました。この偉大な功績に対してユダヤ人の果たした役割は非常に大きかったのです。実際のスポンサーであり、サンタ・マリア号には医師(ロドリゴ・サンチェス) 言語学者(通訳)など多くのユダヤ人が乗り組んでいました。これに刺激を受けて、ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマが東回りで航海をしました。このときの航海長も、ユダヤ人で天文学者のアブラハム・ザカートでした。

12世紀ごろまでは、スペインはヨーロッパの中でもユダヤ人に対して寛大な態度をみせており、特に回教徒は寛大でした。狙いは彼らの商才を利用しようとして市民権も与えていました。しかし、キリスト教会はスペイン政府当局の態度に不満を募らせ、民衆の襲撃が頻発します。特に13世紀フランスからの十字軍(対アラブ民族=ムスリムとの戦い)が入ってくると共に圧迫が激しくなり、カステリア地方のユダヤ人は全員逮捕、投獄、国外追放や虐殺が横行しました。彼らには徴税請負人や金貸しが多く、貧しい民衆のユダヤ人に対する敵意は激しかったのです。

彼らのうち生き延びるためにキリスト教へ改宗するものもありましたが、洗礼を受けることも偽装と見られたのです。それまで、キリスト教会はユダヤ教を敵対視しましたが、以後はユダヤ人そのものを敵視するようになりました。



ヨーロッパで、ユダヤ人を迫害してきた根拠の一つが、新約聖書ヨハネ福音書 8 44~59。ここではイエス自身が彼らの民族主義を非難し、人種を超えた人類愛を説いたのでした。しかし、サドカイ派やファリサイ派の人たちは結局イエスを十字架の死に追いやったのです。特に4世紀にキリスト教がローマ国教に定められた以降から激しい迫害が始まりました。

19世紀は、宗教的理由から迫害するのではなく、民族主義の時代に入り、種族とか「血」が問題になりました。ヒトラーの「血の理論」は典型的な例です。ユダヤ人自体は

長い歴史の中で混血を重ねてきました。生物学的人種概念で彼らを判別すること自体が非科学的です。しかしドイツでは民族的統一が遅れていたため、民族的苦しみを遅くまで体験してきました。それだけに、国内異分子に対する憎悪の念が強かったのです。とくに、ルターユダヤ人嫌いが影響しました。ドイツが統一されたのは1871年、ビスマルクの活躍によるもので、ユダヤ人にも市民権が与えられました。しかし、そのとき同時に「民族の裏切り者」として激しい攻撃の火の手が上がり、そしてドイツはナチス、ヒトラーの時代まで反セミティズム(注:セム語族であるユダヤ人への反抗・迫害を指す)の中心地となったのです。多数のユダヤ人の居住地はポーランドが主で、次いでロシアでした。18世紀以後はゲットーに押し込められて周囲から隔離されました。

1880年ごろから、ポーランドでもロシアでもユダヤ人の大量虐殺が頻繁に起こりました。

(2) シオニズム運動の始まり

シオニズムは、この世紀末の民族主義的な、反セミティズムに対する反動として起こりました。市民権が与えられながら、国民と同化することを国民が拒絶する。それでは、ユダヤ人たちは自分たちの国を造るのではないかと、という考え方を強めました。

当時、ドレフュス事件というのがあり、この裁判に関わったテオドール・ヘルツェルが「ユダヤ人国家」と題するパンフレットを配って、バーゼルで最初のシオニスト会議を開きました。ここで、インフラ整備を含む、具体的で詳細な国づくりの基本方針が掲げられました。彼は44歳で没しますが、ユダヤ人たち

のカナンへの憧れを強烈にしたのもヘルツェルの功績でした。

19世紀に入ると、ヨーロッパで次々と国民国家が誕生し、各地に離散していたユダヤ人たちも新天地を求めてオスマン帝国が支配していたパレスチナに入植し始めたのです。

第一次世界大戦で、ユダヤ人とアラブ人は共に結束してイギリス軍に協力してオスマン帝国と戦い、これを破った結果、現在のヨルダンを含む「パレスチナ」はイギリスの委任統治領となりました。とりあえずは、ここにユダヤ人とアラブ人が幾度も衝突を繰り返しながらも安定した社会生活を営んでおりました。



1947年、建国を熱望するユダヤ人入植者が増えてきて、それに対してアラブ民族主義者の反発が起きました。アラブ人にとっても、パレスチナは自分たちの祖国であり、イギリスと結託してユダヤ人社会を根絶したかったのです。

この地を統治していたイギリスは遂に国際連合に問題の仲立ちを委任したのです。そして国連決議によってユダヤ人たちはパレスチナでの建国が許されました。1947年11月のことです。一方で、アラブ人にとっては不満の種となりました。ユダヤ人に割り当てられた土地は、面積にして現在のほぼ半分でした

が、もともとアラブ人が密集していた地域は除外したため、凹凸の多いいわば飛び地でした。したがってユダヤ人も不満でした。

ここに、アラブ人の激しい抵抗が起り、抗議のストライキが始まり、アラブ人によるテロ行為が勃発。当初はアラブ側の虐殺が相次ぎ、男女を問わず、子供まで虐殺されていったのです。実は、このときまだパレスチナはイギリスの委任統治下にありましたが、イギリスの治安責任者は、アラブ側の暴虐を黙って見ていたのです。イギリスはアラブのもつ石油資源を目当てにしており、邪魔なユダヤ民族が滅亡されて、国連による分割の決議が実現できないことを望んでいたのです。しかも、アラブ側はイギリスの庇護の下にあって、ひそかに武器を調達し、戦力的にも優位にありました。

このとき、ユダヤ人の総数は子供まで合わせても60~70万人程度、一方アラブ側はエジプト、ヨルダン、シリア、レバノン、さらにイラク、サウジアラビアまで加わって合計人口5000万人。結成された連合軍隊は約12万人。ユダヤ側は軍備も薄く武器もほとんど持っていない。国連は、双方に飛行機や武器の輸入を禁止していたのです。当然、ユダヤ人側はアラブ連合軍の敵ではなかったはずでした。この頃また歴史に残る多くのユダヤ人の虐殺行為が相次いだのです。

ところが、翌1948年夏(5月)、突然イスラエルの戦闘機ボーファイター3機がエジプトの空軍基地を襲い、さらに持っているはずもないメッサーシュミット機がシリアの首都ダマスカやヨルダンのアンマンなども襲ったのです。遂にアラブ連合軍は敗北を喫し、今度はユダヤ人側によるアラブ人の虐殺が起きました。これらの強力な戦闘機がなぜユダヤ人の手に入っていたのか。実はニュージーランド映画のロケを偽装したユダヤ人たちが、ロケ地からこれらを盗んで飛び立ったのです。武器の調達はチェコ、ソ連などの密かな援助によるものでした。

この間にイギリス軍は国連決議に基づいて委任統治権を棄権してしまうのです。

5月14日、ここに前年国連によって分割された土地よりもはるかに広大な領土を獲得してユダヤ人国家が誕生。国名を「イスラエル」と決定したのです。これが第一次中東戦争です。

初代イスラエルの総理ベングリオンが誕生し、ここに独立宣言がなされました。

(3) パレスチナ難民問題

もともとパレスチナは、ユダヤとアラブの「共存共栄の地」であるという前提もあって、ユダヤ側は一部のアラブ人に、パレスチナの土地への住居を認めました。これが、当時100万人以上いるアラブ系イスラエル民族(ミズラヒム)の祖先となっているのです。

しかし、このことが「パレスチナ難民」の発生を実現させることになるのです。

時間を省略して話しますと、1947~48年ごろ、イスラエルはこの国からアラブ人を排除しようとする運動を積極的にして戦闘を繰り返し、その結果アラブ人の多くは、家や家財道具を残したまま、50万人も

がガザ地域（エジプト領）とヨルダン川西岸（ヨルダン領）に逃れて行ったのです。これがパレスチナ難民の始まりです。

1967年、第三次中東戦争が勃発。イスラエルはガザと、シナイ半島、ヨルダン領である東エルサレムと西岸、シリア領ゴラン高原を占領し、ガザ地区と西岸のパレスチナ人を軍事支配下に置きました。ユダヤ側に言わせると、ここは古代ユダ王国すなわちダビデ王国が栄えてきた「父祖の地」です。ぞくぞくと彼らはパレスチナ人の地に入植しました。

アラブ諸国は、1973年の第四次中東戦争を経て、力による領土奪還をあきらめました。そしてエジプトは1979年、イスラエルと和平条約を結びました。

アラブ諸国の無力に失望したパレスチナ人組織は、第三次中東戦争以後数々のテロに訴え、世界を騒然とさせてきました。

1987年12月に始まったパレスチナ人の抵抗運動を「インティファダ」（ほう起）と呼びますが、これは武器を使わず、石つぶてを投げて抵抗する抗議運動で女子・子供も加わりました。さすがのイスラエルもこれには驚き、抵抗できませんでした。

ここでイスラエルの左派政権は、当時180万人もいるパレスチナ人を永久に占領下に置くことの非現実性に気がついたのです。イスラエルのラビン、ペレスが主導する労働党政権は、アラファトが率いるパレスチナ解放機構 PLO に歩み寄ります。

1993年9月、PLO のイスラエル承認と引き換えに、占領地のガザと西岸を暫定的に返還することで合意しました。これが、歴史的なパレスチナ暫定自治合意、オスロ合意であります。

しかし、オスロ合意で始まった和平プロセスは、これに反対する青年によるラビン首相の暗殺、その後の右派政権の登場で暗礁に乗り上げております。PLO 主流派のファタハ（パレスチナ民族解放運動）によるガザと西岸での自治も、汚職や人権侵害の横行で住民の支持を失い、2006年1月の自治評議会選挙では、ハマス（イスラム原理主義集団）が圧勝して、オスロ合意の先に見えていたパレスチナ国家樹立の夢は遠のいたのです。

現在ハマスは自爆テロを繰り返しており、イスラエルは彼らをテロリストと呼んでおります。ファタハは宗教にこだわらない「世俗主義」を採るのに対し、ハマスは設立憲章でイスラム法が統治する国家樹立を目指しているのです。彼らはイスラエルが統治するパレスチナ全土内でのイスラエルの生存権を徹底否定し、テロ攻撃は今後当分止みそうもありません。世界最長の領土紛争とも言われている由縁です。

3. ユダヤ民族の原点

ユダヤ民族の原点は、古代イスラエル人です。彼らはどうやってカナンに定住したのか。そのルーツを辿ると前1900年頃の、カルデアのウルという土地にたどり着きます。チグリス・ユーフラテス両川が合流してペルシャ湾にそそぐ現代のイラクのあたりです。

聖書によると、放牧の民（ベドウィン）のテラが、その子アブラム（後にアブラハム）と孫ロト、アブラムの妻サライ（後にサラ）を連れて故郷のウルを出立し、ハランにたどり着きそこに住むのですが（ここでアブラムの父テラは死ぬ）アブラムは神のお告げにより、サライ、ロトを引きつれ、ハランで合流した人々と共にカナンに向かっていきます（創世記 11・12 章）。カナンは熱心な異教崇拜の地で、多神教を崇拝しておりました。

この物語は、1923年イギリスの考古学者ウーリーによるウルの発掘、さらに1934~36年フランスの考古学者パロによる王国マリの発掘によってハランの存在が裏付けられたのです。この周辺はアラム平原（パダン・アラム）と呼ばれ、いわゆるアラム人の地でもありました。

ここに、ユダヤ人の祖先であるアブラムが、紀元前1900年前後カナンの地に足を踏み入れた史実が傍証されたことになるのです。（アブラムという名前は当時から沢山あって特定の個人ではなく、史実では複数のベドウインを指している）

紀元前4000年ごろにウルを含むメソポタミア一帯が大洪水に見舞われた跡が、前述のウーリーによって発見されました。この大洪水の物語は、ウル中期の王ギルガメシュを歌った粘土板の英雄叙事詩「ギルガメシュ」に描かれ、この記述が創世記のノアの箱舟の物語に符合していくのです。

ノアの息子のセムから派生した子孫が、アブラハムにつながっていくことになるわけですが、実際のセム語族と呼ばれる人種は、シュメル人が住み着いていた南部メソポタミアの一部地域に古くから移住定着しており、シュメル文化（最古の文明国）を吸収して文明化していたと推定されております。したがって

アブラハムにつながるユダヤ人も、セム語族の一派ということになります。このセム系遊牧の民は後にエジプト人によりヘブライ（ヘブル）人と呼ばれ、イスラエル人と同一視されております。

フランスの考古学者パロは、マリ帝国の首都マリを発掘した際、広大な王宮に付属する図書館におびただしい粘土板文書があるのを発見しました。これらの文書の中に「ハビルの民」と呼ばれる民族の存在が記されております。聖書で「ヘブル人」と呼ばれる人種がこれに相当すると推測されております。

カナンの地に定住したイスラエルの子孫たちが、ヨセフの時代に飢饉を逃れてエジプトの地に移住したことは、創世記 41 章以下に多くの紙数を費やして描かれております。史実としては前 1730 年頃、カナンの地からエジプトに向かう民族の大移動があったとされております。「ヒクソスのエジプト侵入」と呼ばれ、彼らは全エジプトを支配下におさめ、約 150 年間にわたり君臨しました。



学説では前述のハビルもヒクソスも、北方から南下した混合民族であるとされ、ここら辺から純粹のユダヤ人（ヘブライ人）という民族概念は薄まっています。

ヨセフの計らいでエジプトに移住したイスラエルの民（十二部族）は純粹にユダヤ人であったのですが、カナンからエジプトに移住した民族すべてがユダヤ人であったわけでもないのです。また、当時カナンには多くの人口が残っており、数百年にわたって他国からの侵入者を迎え入れておりました。

一方エジプトの民、とくに王位にある者は異国の入種ヒクソスの支配から脱却しようと手を尽くし、遂に前 1580 年、ヒクソスの王朝は、アモセスの第 18 王朝により倒され、エジプト新王朝が樹立されます。ここから、旧約「出エジプト記」の記述につながっていきます。

4 . ユダヤ民族の神の特質 自然神と人格神

多くの民族の神は自然神であります。太陽や月に始まり、木や石にまで神が宿るわけです。

ユダヤ人にとって、自然や動物や花を、人間の内面的な精神生活の類似（イデオロギー）として高めるものとする例は聖書にも頻繁に見られますが、それらを神とは見なしておりません。

ユダヤ人の神は「人格神」であります。ユダヤ人にとって神の体験は、神と人間との人格的な結合を意味しております。「主は命の神（詩篇 18-47）」「主は生きておられる（エレミヤ書 4-2、サムエル記上 14-39）」という言葉はしばしば誓いを述べる場合に用いられており、ユダヤ人にとって神は生きておられる、という「存在の意識」であり、神の現存体験を意味するのです。

旧約の神の最大の特質は、神の人格性であり、他の宗教が偶像を崇拝するのとは根本的に異なります。聖書における神の表現はすべて擬人的であり、ユダヤ人にとって永遠の存在者でありました。「わたしは初めであり、終わりである。わたしをおいて神はない」（イザヤ書 44-6）という表現は、世界の初めと終わりまで、神は世界のすべての存在者を超越する永遠の超越的・絶対的な存在者を意味しております。「主は神々の中の神、主なる者の中の主」（申命記 10-17）は、他のいかなる神をも超越した存在であることを示しているのです。

しかし一方で、この神がこの世や人間からかけ離れた超越者ではなく、世界と人間との中にしっかりと意思を示してくださる存在として、ユダヤ人たちは把握しました。彼らが「創造者」と呼び、「力の主」と叫ぶのはこのことを指します。

さらにここで大きな特質は「聖」という概念です。イザヤが召命を受けたとき、天使が「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」（イザヤ書 6-3）と、三度も繰り返しているように、聖なる上になお聖なる者であることが強調されております。

唯一の主なる神を信仰するユダヤ人の大敵は、カナン先住民が信奉する豊穡神バールやアシュタルテなどの存在でした。砂漠をさまよい、遊牧の民だった彼らが農耕を営む豊饒の地に定住すると、こうした異教神に誘惑されるユダヤ人為政者も多分にあったわけです。旧約聖書の歴代誌や列王記や預言書は、まさに

唯一の神と偶像崇拜の異教徒との闘争の記述でもあります。

5 . ユダヤ教の確立と離散

前 1004 年頃ダビデによって築かれたイスラエル統一王国も、その子ソロモンの死後南北に分裂しました。そして前 722 年頃北イスラエルは強国アッシリアによって滅ぼされました。さらに前 587 年ごろ、南ユダの首都エルサレムも新バビロニアによって陥落、多くのユダヤ人たちはバビロニアに連行されます。そこでも彼らは、異教崇拜とそれに伴う悪徳の実態を見せ付けられました。しかし、捕囚のユダヤ人たちは、唯一なる神への信仰を捨てませんでした。

かつてヨシュアによって忠実に契約された唯一神への信仰は、異郷の地にあってもなお強力に彼らの宗教共同体としての結束を強めていったのです。前 538 年バビロニアの捕囚から開放された彼らは、前 515 年エルサレム神殿の再建を実現します。このとき祭司・書記官エズラ、ネヘミヤによって申命記の内容が整えられました。ここに、モーセ 5 書を中心とする聖書（タナハ）のみを信奉する「ユダヤ教」が確立されることとなります。その後の長い歴史の中で、国家をもたない民族共同体 = 宗教共同体としてのユダヤ民族の萌芽をみるわけです。

ここに、ユダ族である純血の祖先の時代から、その後長い期間にさまざまな異郷の民族と混血・融合してきた「ユダヤ人」という民族が生き続けていくのです。

イスラエルはアレキサンドロスの東征によって前 330 年ごろからギリシャの支配下に置かれていましたが、ユダヤ人たちはこれに反抗して、前 167 年ヨハネ・ヒルカノス 世を中心とするマカバイ王朝を打ち立てます。これもわずか 100 年余で、ポンペイウス率いるローマの支配下に入り（前 63 年）、キリストの出現を見ながらその後 2 度にわたるローマとの闘争・敗北によりユダヤ人は完全に国を失い、以後約 1800 年にわたって離散の民族（ディアスポラ）となっていきました。

一方、ユダヤ人はひたすら唯一神を信奉し続け、彼らの神は自然神ではなく人格神であり、その信仰が世界と人間の実存に直接強く関わるものであること、そこから派生したイエス・キリストの教えが「審き」ではなく「愛」を説くものであること これらの理由から、アジアの西端に発生したキリスト教が、ギリシャ・ローマを経由してヨーロッパに受け入れられていったのです。

その後キリスト教は、ヨーロッパ文化の根幹をなすものとして、さらには私たちの大切な宗教体験として、聖書の教えと思想は切り離すことのできないものとなったわけであります。